

6月25日(土)、文化祭が行われました。また、22日(水)には文化局のステージ発表が行われ、演劇部やダンス部、バトン部などが舞台上に立ちました。両日とも熱い想いに溢れた生徒たちの姿が見られました。と伝えたいところですが、残念ながら両日とも立ち会うことが叶いませんでした。それは、22日(水)早朝、新型コロナ陽性と診断され、自宅待機を余儀なくされたからです。

誰よりも何よりも？ 生徒の“伴走”が好きな人間です。この期に及んで何たる不覚か。あまりにも酷い仕打ちではありませんか。本当に残念でなりません。

27日(月)現在、体調は回復しており、7月1日(金)に復帰する予定です。生徒自治会生徒たちなどを通じて、様子を聞こうと思います。(写真は、文化祭の一場面)



## 『生きるぼくら』

上記の通り、現在、自宅待機中です。が、体調はすこぶる良好です。すぐにでも“普通”に戻りたいのですが、感染から10日間は行動制限が課せられるとのこと(私は自宅待機)。仰せの通り、逸る気持ちを抑えながら来る日に備えている状況です。どこでどう感染したのか腑に落ちぬまま診断いただいたお医者さんから、「オミクロン株の典型ですね、これは」と言われました。2~3日、熱が下がらず、「針で刺すような喉の痛み」が続きました。水分さえも喉を通らず、まして、食事などままたぬ状態でした。が、少しずつ緩和されていきました。薬が効いてくれました。

先週末、『生きるぼくら』(原田マハ)を完読しました。最近(ここ数年)、組織論とか教育論、人生論ばかりに関心がいき、小説の類に触れる機会がめっきり減っていました。いつか読みたいと思って何年か前に購入した本(結構この手のものが多くあります)の一つでしたが、この機をやっと得ることができました。その文庫本の裏表紙に、この本の紹介が次のように書かれています。

いじめから、ひきこもりとなった二十四歳の麻生人生(あそうじんせい)。頼りだった母が突然いなくなった。残されていたのは、年賀状の束。その中に一枚だけ記憶にある名前があった。「もう一度会えますように。私の命が、あるうちに」マーサばあちゃんから？ 人生は4年ぶりに外へ！ 祖母のいる蓼科(たてしな)へ向かうと、予想を覆す状況が待っていた。

人の温もりにふれ、米づくりから、大きく人生が変わっていく。

久しぶりに読み応えがありました。やや部厚めな文庫でしたが、一気に読み終えました。途中、お約束通りに涙で目を潤ませながらも…。離婚、ひ

きこもり、認知症などと重いテーマばかり。そうした中、主人公・麻生人生を含めすべての人たちが人としての大切なことに気づかされます。それは、古来、日本の農業の軸としてきた稲作、米づくりを通じて、人が繋がっていくということに気づかされる内容でもあるのです。

この話に出てくる米づくりは普通とは違います。田植え前に土を耕し、水を張り、田植え後には農薬を撒いて除草・除虫に配慮していく。また、これらの工程には農機具の使用は必須です。そうしてできたお米が当たり前なはずですが、ところが、話中の米づくりは「自然の田んぼ」です。つまり、土を耕さず、肥料・農薬を使わず、草や虫を敵にしないというやり方なのです。これを読みながら、かつて読んだ『奇跡のりんご』(青森・木村秋則さんの無農薬りんご栽培)を思い出しました。このりんごは得も言われぬ美味しさだということ。自然の営みに沿った農法は、いろいろなことを教えてくれます。本当に美味しいものは人工的であってはならぬこと、自然に従うには手間暇を惜しまぬこと、その農法には人手が要ること。

マーサばあちゃんのもとには孫の麻生人生をはじめ、ばあちゃんの生き方と自然農法に共感し、学ぼうとする人が集います。人の優しさに触れ、それに報わんとする人が集います。こうした人の力に生きる糧を見出していこうとする話です。

『生きるぼくら』を読了し、何となく元気が出ました。米の力、自然の力なののでしょうか。途中から青年期に帰った自分もいたような気がします。まだまだ若いという証拠なののでしょうか。

読書の魅力とはこうしたことだと思います。肩の力を抜いて読んだ本の中で、いつの間にか会いたい自分に出会えたりするものです。